

## 優秀賞 こうきさん（東京都 高校2年）

チリ北部、その晴天率の高さから各国の天体観測基地が集結するアタカマ砂漠は思わぬ形で世界中の注目を集めた。永遠と続くはずの砂漠景色の中に、不相応な色とりどりの衣類が捨てられていたのだ。もちろん私は直接目で見たわけではないが、テレビ越しに見るその景色は強烈なまでに異様なものだった。そこは、まだ着られるような服ばかりが投棄され、リユースや循環型社会など叫ばれている社会の中で起こっているとは到底思えなかった。聞いてみればそれらの衣類はアジア、欧州での売れ残った衣類が循環型社会の一部分としてラテンアメリカにて再販がなされたが、それでもなお売れ残ったもののようだ。なぜエコのために行ったことが遠く離れた地で公害問題となるトレードオフが発生してしまったのだろうか。

それらを考察するには私たちが実際どのように衣類を循環させようとしているのかを考える必要がある。私の住む東京では衣類をエコに処分するならそれを代行してくれる団体に寄付するのが手っ取り早い。そして彼らは東京中から集めた大量の衣類を発展途上国などにまとめて発送する。一見当たり前のように見えるこのプロセスに実はトレードオフの原因が隠されているのだ。このように大量に送られた衣類すべてが発展途上国で消費されるのか。当然そんなことはない。発展途上国でも不要なものは不要なのだ。そしてそれが冒頭にあったように大量廃棄されてしまうのだ。しかし中には、まだ私が着てもいいと思う服があった。ではなぜそれがすぐ近場の東京にいた私の元へは届かず、遠く離れた南米で公害を引き起こしてしまったのだろうか。

東京は極端に地域内の結びつきが希薄だ。隣人がどのような人なのかさえも知らない。もししたら隣人は私が欲しいようなジーンズを良かれと思って遠く離れた外国にCO<sub>2</sub>を出しながら船舶などで輸送してしまっているのかもしれない。しかし私はそれを知ることができていない。

SDGsが策定され早7年目となるが、まだ行動を起こしていない人も多い。しかし、徐々

に多くの人は SDGs を目にするようになり、些細なことでも関わるが増えていくだろう。すると 2030 年にはどうなっているだろうか。すべての人が循環型社会という同じ目標に向け始動できるようになる、それが 2030 年だ。お互いの必要が共有され、先ほどのような衣類のトレードオフは解決される。隣人が捨てようと思った服は私が再利用する。何も CO2 を大量排出してまで外国に廃棄しなくてよいのだ。また、これは地域規模に限定されることではない。場合によっては実際に支援を必要とする外国の人と事前に何が欲しいのかを話し合い、無駄を減らせるかもしれない。

私は縁があってカクマ難民キャンプの現地の難民の方とオンラインで話す機会があった。そこで私は彼に「私たち先進国から支援があるとしたらどのようなものが一番良いか」と聞いた。彼は「自立できるチャンスが欲しい」と答えた。多くの人は衣類・医療品などが彼らに最も必要なのだと思っははいないだろうか。実際の声は違うのだ。このようなコミュニケーション不足による「ズレ」がアタカマ砂漠の衣料品の廃棄のようなトレードオフを生んでしまっているのだと気づいた。トレードオフを解決する方法、それは緻密なネットワークの構築だ。ネットワーク内で何が必要で何がそうでないかを見極め、最も効率的で効果的な方法を探し出す、それこそが真の理想郷「循環型社会」なのだと考える。

2045 年には衛星通信サービスが飛躍的に進歩して現在よりも容易に、誰とでも話せるようになることが予測される。その中で地球規模の緻密なネットワークを築き、認識の「ズレ」から出る様々なトレードオフを埋めていく、それこそが 2045 年の姿なのだ。私はその社会に向けて、「人と人を直接つなぐ」という繋がり構築の一助を担っていきたい。